

コミュニケーションの本質的役割の少なくとも一つは、他人に何かを知らせることである。ところで、他人に何かを知らせるということは、他人に何か知られるということと同じではない。知らせることによって知られることにならないのは、話し手の知らせようとする意図である。ここで、伝達される内容を C と表すことにしよう。それでは、話し手が聞き手に C であることを知らせようとする意図があり、その意図に基づいた何らかの行為によって聞き手が C と知ったとすれば、それは話し手の行為がコミュニケーションであるための十分条件を満たしているといえるだろうか。ところが、これには反例があるのだ。次のようなケースを考えてみよう。

【事例 1】A は B に C を知ってもらいたいと思っている。しかし、A は B にそれを直接言うのは押しつけがましいと考え、C が書かれた日記を、B の目に触れる場所に、さもそれがたまたま置き忘れられてあるかのようにさりげなく置いた。A の計略は成功し、B は A の日記を読んで C を知った。B は他人の日記を勝手に読むことはよくないことだと知っているので、日記をさも誰も手を触れていないかのようにもとの位置に戻し、何事も無かったふりを決め込んだ。B の態度はその日から急変し、C のことを念頭に置いた言動が見られるようになったため、A は B が自分の日記を読んだことを知ることができた。

事例 1 において、A は B に C を知らせる意図を持っており、その意図に基づいた、日記をさりげなく置いておくという行為によって、B に自分の本心を知ってもらうことに成功している。だが事例 1 のような出来事は、普通の意味ではコミュニケーションとは呼べないだろう。この事例においては、A はなお多くのことを B に対して秘密のままにしているからである。例えば A は、A が B に C を知らせたいという意図を持っている、ということを B に対しては秘密にしている。通常のコミュニケーションにおいては、このような秘密は存在しない。普通のコミュニケーションにおいては、話し手は C を聞き手に知らせようとする意図を持つだけでなく、話し手がそのような意図を持っていることをも、聞き手に知らせようとする意図を持っているし、コミュニケーションが成功すれば、聞き手は C を知るばかりでなく、C を聞き手に知らせようという話し手の意図をも知ることになるのである。

かくして、コミュニケーションにおいては、聞き手に C が知られることと、C を聞き手に知らせる意図を話し手が持っていることに加えて、話し手が、C を聞き手に知らせる意図を持っていることを聞き手に知らせる意図を持っていることが必要であるとわかる。コミュニケーションの成立条件におけるこの二重の意図は、その先駆的研究者であるグライス (Grice, 1948) によって、

The speaker intends . . . 伝達意図
that the hearer know
that the speaker intends . . . 情報意図
that the hearer believe
that C

という構造を持つと分析されている。話し手が C を聞き手に知らせようとする意図は「情報意図」、話し手が情報意図を持っていることを聞き手に知らせようとする話し手の意図は「伝達意図」と呼ばれている。すると事例 1 は、話し手が情報意図は持っているが、伝達意図は持っていないケースとして理解しうる。このような事例は、コミュニケーションの中でも、“covert communication” と呼ばれている。それに対し、話し手が情報意図だけではなく伝達意図をも持っているようなコミュニケーションは、“ostensive communication”、または、“overt communication” と呼ばれている。通常のコミュニケーションというのは、後者のようなコミュニケーションであるとグライスは考えたのである。

しかし、グライスのこのような議論に対し、グライスの弟子であったストローソンがさらなる反論を加えた。情報意図と伝達意図があるだけでは、コミュニケーションの十分条件としては不十分である、とストローソンは主張したのである(Strawson,1964)。このことを理解するには、次のようなやや複雑な事例を検討してみるのがよい。

【事例 2】 A は B に C を知ってもらいたいと思っている。しかし、A は B にそれを直接言うのは押しつけがましいと考え、C をつづった日記を、B の目に触れる場所に、さもそれがたまたま置き忘れられてあるかのようにさりげなく置いた。A の計略は成功し、B は A の日記を読んで C を知った。A は、単に B に C をそれとなく知らせるだけではなく、自分がそのことを B に知らせたいと意図していることをも知らせたいと考え、B が A の日記を覗き見している所を、わざと B に勘付かれるように、部屋のドアの隙間から覗きこんだ。この計略も見事成功し、B は A が部屋のドアの隙間から覗き込んでいることに気付き、日記が置いてあったのは、たまたま A が忘れたからではなく、A が C をさりげなく B に知らせるための計略だったことを知った。しかも B はその性格から、A に見られていることに気付いたことや、A の計略に気付いたことを A には悟られまいとした。もちろん A は、B のそのような性格をあらかじめ見越して計略を図ったのであるし、A はその後の B の言動から、B が A の情報意図と伝達意図を知っていることを知ることができた。

事例 2 においては、話し手は情報意図と伝達意図に基づいてある行為を行い、その結果として、聞き手は話し手の情報意図と伝達意図を知ることになった。しかし、事例 2 のようなケースは、通常のコミュニケーションとは言えないだろう。なぜなら、A はなお B に対

して重要な秘密があるからである。例えば A は、A が B に C を知らせる意図があることを知らせる意図があることを知らせる意図がある、ということを B に対して隠している。言い換えるなら A は、A が伝達意図を B に知らせる意図があることを、B に対しては隠しているのである。

事例 2 において A が隠している意図のことを、伝達意図伝達意図と呼ぶことにしよう。それでは、話し手が情報意図と伝達意図と伝達意図伝達意図を持ち、それに基づいた行為によって、聞き手が話し手の情報意図と伝達意図と伝達意図伝達意図を知ることになれば、それは通常の意味でのコミュニケーションだといえるだろうか。答えは今回も否である。なぜなら、伝達意図伝達意図があっても、話し手はそれを伝える意図を秘密にしておくことが可能であり、そのような秘密が残っている場合は、通常の意味でのコミュニケーションとはいえないからである。この問題が、高次の意図を一つ一つ付け加えていっても解決しないのは明らかである。仮に伝達意図伝達意図伝達意図なるものを考えても、それを知らせる意図を話し手が秘密にするというケースが、なお想定しうるからである。

ストローソンはこのような考察から、コミュニケーションにおいては、話し手の意図が “thoroughly overt” でなければならぬと主張した。つまり、話し手が C を知らせる意図（情報意図）、C を知らせる意図を知らせる意図（伝達意図）、C を知らせる意図を知らせる意図を知らせる意図、その意図を知らせる意図、・・・以下同様、というように、無限に高次の意図を持っているのでなければ、通常のコミュニケーションとはいえないというのである。

だが、私たちがコミュニケーションをするとき、無限に高次の意図が飛び交っていると考えるのは、実情に合致しないように思われる。どうも私には、コミュニケーションの本質はそのような伝達の意図が〈ある〉ことにはなく、秘密にしておこうとする意図が〈ない〉ことに存するように思われるのである。秘密ということに関連するのだが、事例 1 と事例 2 の前後や間に、次に挙げるような事例を挿入し、事例の系列を並べてみると、問題の全体像が見やすくなると思う。

【事例 0】 A は C を B に知られたくないので、それを B に知らせずに秘密のままにしておく。A は秘密を隠し通すことに成功し、B は C を知らないままである。

【事例 0.5】 A は C を B に知られたくないので、それを B に知らせずに秘密のままにしておく。しかしある日こっそりと A の日記を盗み見た B は、C を知ってしまう。A は B に秘密が漏れたことには気付かない。

【事例 1.5】 A は B に C を知ってもらいたいと思っている。しかし、A は B にそれを直接言うのは押しつけがましいと考え、C をつづった日記を、B の目に触れる場所に、さもそれがたまたま置き忘れられてあるかのようにさりげなく置いた。A の計略は成功し、B は A

の日記を読んで C を知った。B は他人の日記を勝手に読むことはよくないことだと知っているのに、日記を、さも誰も手を触れていないかのようにもとの位置に戻し、何事も無かったふりを決め込んだ。A は、B の態度がその日から急変して、C を念頭に置いた言動が見られるようになったことから、B が自分の日記を読んだことを知った。A にとって計算違いだったのは、勘の鋭い B が、A がわざと日記を B の目に触れるところに置いて B に C をそれとなく知らせようとした、という A の計略に勘付いてしまったことである。A は、自分の情報意図が B に知られてしまったことに気付いていない。

【事例 2.5】A は B に C を知ってもらいたいと思っている。しかし、A は B にそれを直接言うのは押しつけがましいと考え、C をつづった日記を、B の目に触れる場所に、さもそれがたまたま置き忘れられてあるかのようにさりげなく置いた。A の計略は成功し、B は A の日記を読んで C を知った。A は、単に B に C をそれとなく知らせるだけではなく、自分がそのことを B に知らせたいと意図していることをも知らせたいと考え、B が A の日記を覗き見している所を、わざと B に勘付かれるように部屋のドアの隙間から覗きこんだ。この計略も見事成功し、B は A が部屋のドアの隙間から覗き込んでいることに気づき、日記が置いてあったのは、たまたま A が忘れたからではなく、A が C をさりげなく B に知らせるための計略だったことを知った。しかも B はその性格から、A に見られていることに気付いたことや、A の計略に気付いたことを A には悟られまいとした。もちろん A は B のそのような性格をあらかじめ見越して計略を図ったのであるし、A はその後の B の言動から、B が A の情報意図と伝達意図を知っていることを知ることができた。しかし A にとって計算外だったのは、勘の鋭い B が、A のこの二重の計略に気付いてしまったことである。つまり B は、A がわざと日記を B の目に触れるところに置いて、B にそれを盗み見させ、なおかつその光景を A にドアの隙間から覗き込まれていることを B にそれとなく気付かせる、という計略の全体を見抜いてしまったのである。言い換えると、A が隠そうとしていた自身の伝達意図が、B にばれてしまったということである。一方 A は、自分の情報意図が B に知られていることは知っているが、自分の伝達意図までもが B に知られてしまったことには気付いていない。

シフアー (shiffer,1972) は、コミュニケーションにおけるこの込み入った問題を、高次の知識の問題に読み替えることを提唱している。A が C を知っているということを、KaC という記号であらわすことにしよう。すると、KbKaC という表記は、B が、A が C を知っている、ということを知っているということであらわしていることになる。

さて事例 O においては、どのような知識が存在しているだろうか。KaC は成り立つが、A は C を B に隠し通すのだから、KbC は成り立たないし、KbKaC も成り立たない。A は、B が C を知らないということも知っているし、B が、A が C を知っているということを知らないということを知っているとも考えられる。したがって、知らないということを一K

であらわせば、事例 0 における知識状態は KaC 、 $\neg KbC$ 、 $\neg KbKaC$ 、 $Ka\neg KbC$ 、 $Ka\neg KbKaC$ となる。

事例 0.5 ではどうだろうか。この事例では、A の秘密が B に漏洩しており、C および KaC が B に知られてしまうことが特徴である。したがって KaC 、 KbC 、 $KbKaC$ が成り立つ。さらに、秘密が漏れたことに A は気付いていないので、 $\neg KaKbKaC$ 、 $\neg KaKbC$ が成り立つ。また、B は A が秘密の漏洩を知らないことを知っていると考えられるので、 $Kb\neg KaKbKaC$ 、 $Kb\neg KaKbC$ が成り立つだろう。

事例 1 は covert communication の例であるが、この事例では、 $KaKbC$ 、および $KaKbKaC$ が成り立つことが特徴的である。しかし、B は A の計略に気付いていないから、 $\neg KbKaKbC$ 、 $\neg KbKaKbKaC$ であり、A はそのことを知っているから、 $Ka\neg KbKaKbC$ 、 $Ka\neg KbKaKbKaC$ である。

事例 1.5 は、“covert communication の失敗”と呼ぶことができそうである。この場合は、 $KaKbC$ および、 $KaKbKaC$ が B に知られてしまうことが特徴となる。つまり、covert communication では成り立たなかった $KbKaKbC$ および、 $KbKaKbKaC$ が成り立ち、しかもこの高次の秘密の漏洩に A は気付いていないのだから、 $\neg KaKbKaKbC$ および、 $\neg KaKbKaKbKaC$ が成り立つ。B は A が高次の秘密漏洩に気付いていないことを知っているので、 $Kb\neg KaKbKaKbC$ および、 $Kb\neg KaKbKaKbKaC$ も成り立つ。

事例 2 は、グライスの基準では overt communication の一種となってしまうが、ストーリーソンの批判を考慮すると、これは thoroughly overt communication ではない。Overt な部分もあるが、肝心なところでは covert なのであるから、事例 2 のようなコミュニケーションは“covert overt communication”と命名してよいであろう。この例では、 $KaKbKaKbC$ および、 $KaKbKaKbKaC$ が成り立つことが特徴的である。しかし、B は A の二重の計略には気付いていない。つまり $\neg KbKaKbKaKbC$ 、 $\neg KbKaKbKaKbKaC$ である。一方 A は、B がそのことを知らないこと知っている。したがって、 $Ka\neg KbKaKbKaKbC$ と、 $Ka\neg KbKaKbKaKbKaC$ が成り立つ。

最後に事例 2.5 はどうなるだろうか。これは“covert overt communication の失敗”と命名できる。事例 2.5 では、事例 2 において B に知られていなかったことが知られてしまっているので、 $KbKaKbKaKbC$ および、 $KbKaKbKaKbKaC$ が成り立ち、なおかつこのことを A が知らないのだから、 $\neg KaKbKaKbKaKbC$ と、 $\neg KaKbKaKbKaKbKaC$ が成り立つ。B は A がそれを知らないことを知っているから、 $Kb\neg KaKbKaKbKaKbC$ および、 $Kb\neg KaKbKaKbKaKbKaC$ が成り立つだろう。

このような情報を巡る壮絶なやり取りは、スパイ活動を連想させるだろう。実は、これらの事例は、さまざまなレベルのスパイ活動にそれぞれ対応していると考ええると、理解しやすいのである。スパイ活動には様々な種類があるが、花形はやはり諜報活動である。普通のスパイ、つまり 1 重スパイの仕事は、相手国の国家機密を、それと知られないように複写し、本国に伝えることである。相手国にしてみれば、国家機密という秘密を隠すこと

に失敗したことになるのだから、これは事例 0.5 に相当することになる。2 重スパイが現実
にどれだけ存在するかわからないが、その役割は次のように説明できる、A 国と B 国があ
るとしよう。A 国の 2 重スパイというのは、一見すると A 国で暗躍する B 国のスパイに見
えるが、本当は A 国に忠誠を誓ったスパイである。このスパイは A 国の国家機密を隠密裡
に B 国に伝えると称しながら、A 国にとって B 国に伝わると都合のよい情報のみを B 国に
伝える。実際は、そのような情報はニセ情報であることが多いのだろう。しかしここでは
話を簡単にするために、スパイが B 国に伝える情報は、A 国の息がかかっているとはいえ、
真実であると仮定しておこう。もちろん、どのような情報をスパイが B 国に伝えるかは、A
国の情報局が決定するので、A 国は、どのような情報が B 国に「漏れた」かを把握してい
る。

2 重スパイの暗躍によって達成されるのは、事例 1 と同様の知識状態である。ある意味で
は、2 重スパイは国家間の“covert communication”を促進していると言えるのではないだ
ろうか。現実の世界には 3 重スパイや 4 重スパイは存在しないだろう。しかし理論的には
そのような存在を考えることができ、3 重スパイは事例 1.5 に、4 重スパイは事例 2 に対
した知識状態を作り出す。一般に n 重スパイは事例 $n/2$ に対応していることになる。

ところで、このような知識状態の微妙な違いが、行動に変化をもたらすことがあるのだ
ろうか。ある、というのが答えである。互いが相手の予想の裏を読まなければならないよ
うな状況では、微妙な知識状態の違いが行動に違いをもたらすことがあるのである。例え
ば、A 社と B 社が大型公共事業の競争入札に参加していたとしよう。参加している会社は
A と B の 2 社だけであり、どちらの会社もなるべく高い値段で請負いたいと考えているの
だが、もちろん請負を勝ち取るのはより安い値段を提示した会社である。提示できる金額
は 1 億円単位であるとしてしよう。

B 社は A 社に産業スパイを送り込み、A 社が入札で提示する予定の金額をあらかじめ盗
み見ることに成功したとしよう。相手方の入札額が分かれば、あとはそれよりも 1 億円安
い金額を提示すればよい。これは事例 0.5 に対応した事態である。しかし、仮にもし産業ス
パイが A 社に寝返り、B 社に A 社の予定入札額を伝えたことを知らせたとしたらどうだ
ろう。産業スパイは、2 重スパイになったのである。この場合 A 社は、B 社が A 社の従来
の予定入札額よりも 1 億円安い金額を提示すると予想できる。A 社はその予測に基づいて、
本番の入札では、当初の予定入札額より 2 億円安い金額を提示すればよい。この話は、同
じような調子で複雑化していくことが可能である。この産業スパイが、A 社に B 社に A 社
の当初の予定入札額を伝えたことを伝えた、ということを B 社に告白したとしよう。つま
り 3 重スパイになったのである。3 重スパイというのは 1 重スパイと同じだと思われるかも
しれないが、そうではない。というのも、結果として達成される知識状態が 1 重スパイの
場合と異なり、結果として引き起こされる行動も異なるからである。3 重スパイが暗躍す
る場合、B 社は、A 社が当初の予定入札額より 2 億円安い値段を本番では提示すると予測
できるので、本番では A 社の予定入札額より 3 億円安い値段を提示するだろう。一般に、A

社の当初の予定入札額を S 億円とし、 n 重の産業スパイが暗躍した場合を考えると、 n が偶数である場合、A 社は $S-n$ 億円、B 社は $S-n+1$ 億円を提示して A 社が入札に勝つことになり、 n が奇数である場合、A 社は $S-n+1$ 億円、B 社は $S-n$ 億円を提示して B 社が入札に勝つことになる。

上記のことを整理すると次のような表になる。

事例	命名／スパイに例えると	知識状態
0	秘密を隠す スパイなし	KaC、 \neg KbC、 \neg KbKaC、 Ka \neg KbC、Ka \neg KbKaC
0.5	秘密を隠すことの失敗 1重スパイ	KaC、KbC、KbKaC、 \neg KaKbC、 \neg KaKbKaC、 Kb \neg KaKbC、Kb \neg KaKbKaC
1	Covert communication 2重スパイ	KaC、KbC、KbKaC、 KaKbC、KaKbKaC、 \neg KbKaKbC、 \neg KbKaKbKaC、 Ka \neg KbKaKbC、Ka \neg KbKaKbKaC
1.5	Covert communication の失敗 3重スパイ	KaC、KbC、KbKaC、 KaKbC、KaKbKaC、 KbKaKbC、KbKaKbKaC、 \neg KaKbKaKbC、 \neg KaKbKaKbKaC、 Kb \neg KaKbKaKbC、Kb \neg KaKbKaKbKaC
2	Covert overt communication 4重スパイ	KaC、KbC、KbKaC、 KaKbC、KaKbKaC、 KbKaKbC、KbKaKbKaC、 KaKbKaKbC、KaKbKaKbKaC、 \neg KbKaKbKaKbC、 \neg KbKaKbKaKbKaC、 Ka \neg KbKaKbKaKbC、 Ka \neg KbKaKbKaKbKaC
2.5	Covert overt communication の 失敗 5重スパイ	KaC、KbC、KbKaC、 KaKbC、KaKbKaC、 KbKaKbC、KbKaKbKaC、 KaKbKaKbC、KaKbKaKbKaC、 KbKaKbKaKbC、KbKaKbKaKbKaC、 \neg KaKbKaKbKaKbC、 \neg KaKbKaKbKaKbKaC、 Kb \neg KaKbKaKbKaKbC、 Kb \neg KaKbKaKbKaKbKaC
3	Covert overt overt communication	...

整数番号の事例、すなわち事例 0、1、2 では、最も高次の知識状態は A のものであり、.5 がつく事例、すなわち事例 0.5、1.5、2.5 では、最も高次の知識状態は B のものであることに注目しよう。このことは、何かを秘密にすることに成功する場合は A に有利な状態がもたらされ、その秘密が漏れてしまう場合は B に有利な状態がもたらされることを意味している。

さて、ストローソンが通常のコミュニケーションだと主張する **thoroughly overt communication** とは、この事例の系列を無限に進んだ先の極限にあるといえるだろうか。シファアは相互知識 (**mutual knowledge**) というもの考案し、C が A と B の相互知識であるということは、**KaC**、**KbC**、**KaKbC**、**KaKbC**、**KbKaKbC**、**KaKbKaC**・・・というような知識状態の系列全てが成り立つ状態であると定義した。上記の事例の系列を極限まですすめば、この条件は満たされるだろうか。私はどちらの問いにも「否」と答えたい。前者に対して賛成できないのは、何重スパイであろうとも所詮スパイはスパイであるように、どれほどコミュニケーションを **overt** にしようとも、**covert** な部分があつては、結局は秘密を隠すことの延長だと理解するべきだと考えるからである。2重スパイも3重スパイも100重スパイもスパイの一種であり、**covert overt communication** も、**covert overt overt communication** も **covert communication** の一種なのである。後者に対して「否」と答えたいのは、この系列のいかなる事例においても、達成される知識状態の中に「**¬Ka**」、「**¬Kb**」、「**Ka¬Kb**」、「**Kb¬Ka**」で始まるものが含まれており、どこまでいっても相互知識を確立できるには至らないと思われるからである。

真の **overt communication** を理解するためには、話をすべて逆転させて考えなければならないのではないだろうか。私たちは当初、**covert communication** にどのような条件を付け加えれば通常のコミュニケーションになるか、という問題を立てたのだが、探究の方向性はおそらく逆となるべきだったのである。私たちははじめから **overt communication** をしてしまっている。問われるべきは、どのような条件が加われば、それが **covert communication** になるかということだったのではないだろうか。私には、コミュニケーションをするよりも、秘密にすることの方が、知的により複雑な行いであるように思われる。相互知識とは個人的知識の無限に積み重ねて到達するものではなく、私たちは相互知識から出発し、発達の過程で個人的知識に至るのではないだろうか。「サリーとアンの課題」に代表される発達心理学の諸研究は、そのような逆の方向性を示唆していると思われる。

参考文献

H.P. Grice, 'Meaning' (1948), in *Studies in the ways of words*, 1989, Cambridge, Mass: Harvard University Press.

P. F. Strawson, "Intention and Convention in Speech Acts," in *Philosophical Review*, vol.73, 1964, pp.439-460.

Stephen R. Schiffer, *Meaning*, 1972, Oxford: Clarendon Press.